



Est. 1912

よこ館だより

発行：至誠学舎立川 編集：法人事務局



ある日のこと

恒常的な人手不足が主因となって、至誠ホーム全体の調子が良くない。加えて、新型コロナウイルスによる事業の利用控えが続く。加えて「濃厚接触」によって陰性であっても2週間の自宅待機を余儀なくさせられる職員で益々手不足と二重三重に調子が上がらない。マイナススパイラルの典型である。もちろんいろいろな対抗策を打つがなかなか手ごたえがない。

さて、それでも明日はやって来る。ある日のこと、51人を数えるフォーリンスタッフの一人が水疱瘡に罹ったとの報告。どうやらヘルペスの高齢者から感染したらしい。ことは複雑で、インドネシアから来日している当人は予防接種をしたかどうかわからない。感染が拡大しても困る。対応について所属長の園長と相談していた矢先、けたたましいサイレンが窓越しに響いてくる。種類は増え音量も次第に大きくなる。「嫌な勘」が働く。園長の携帯が鳴る。大抵、非火災による発報で消防が駆け付けるというお粗末である。そうすると最近では消防車に救急車、パトカーと場合によっては覆面までの緊急自動車オールスターズのお出ましとなる。しかし、この日は少し事情がちがった。なんでも至誠ホームの西側にあるアパートで不審者が暴れていて建物から煙が出ているとのこと。上履きのまま大慌てで駆けつけると既に不審者は警察官に取り押さえられていて、出ている煙とは不審者が振り回した消火器から出た消火剤のことだったらしい。ここでまた嫌な感じが頭をよぎる。「ラマダーン」と呼ばれるイスラムの断食の時期の早朝、人事不省に陥って国分寺市の清掃工場に警察に保護されパトカーでホームに帰宅となったフォーリンスタッフが居たのだ。まさか、取り押さえられたのは「うちの外国人スタッフ?か!」地面に頭を押さえつけられているのではっきりとは見えないが遠目には外国人にも見える。だとすると、また関係各方面との「一悶着」を覚悟せねばならんなあ。ついつい、近づいてしまう私に「あまり近づくと興奮するので」と差し止める消防官。事情を話すと「どうも日本人で、このアパートの住人の様です」と。ようやく一安心だ。大量の車両に通行止めを食らっていたブルークロスの送迎車も一便の利用者を降ろし二便の迎えに出ていく。集まった烏合の衆はさながら散開の様相となる。

歩きながら「水疱瘡の感染対策」を園長と確認して自室へ向かう。時計を見ると来客の時間である。割と重たい雰囲気の人々への対応を済ませると既に時計は11時近く。

たしか、「水疱瘡報告」に園長がやって来る前に、朝一でやりかけていたことがあったのだが……。不審者と火災の騒ぎで一切が飛んでしまった。

こうして今日も充実した?一日が過ぎていく。

常務理事 旭 博之

本部事務局だより

①仕事とお金に対する意識

日本人は「人は金のためだけに、働いているわけではない」という「お金に対する禁忌感」が強い。もちろん働く事に「働ける喜び」「やり甲斐」「成長が実感でき」、さらに「みんなが喜んでくれる」など精神的な充足感があるのはもちろんだが、まず第一義的にはお金を稼いで生活することが前提であり、その為につらくとも仕事をしているのが本音である。

JR品川駅内のコンコースに並べられた「今日の仕事は、楽しみですか」というデジタルサインが、批判を受けて1日で終了し謝罪に追い込まれた。「お金を稼ぐために仕事しているのに、仕事は楽しいものだというお仕着せ」は人々の本音の心を不快なものにさせたのである。世界的にみれば「お金の為に働く」というのが普通であり、その為につらい仕事にも耐えるのが常識である。その代償として高い賃金を要求するのもまた常識である。先日米国のスタバは人材の確保と引き留めの為に社員の時給を平均17\$ (1,900円)にすると報じられた。スイスの最低賃金は2,600円と世界最高である。賃金の高さの為にスイスの企業が衰退しているわけではなく、賃金の安い日本が貧しくなっている。福祉従事者の賃金が平均を大きく上回り、我先に入社試験に殺到する時代が来てほしいものである。(法人事務局長 野島 忠幸)

事業本部情報

児童事業本部

10月に緊急事態宣言が解除され、緊張感から少し解放されましたが、第6波への懸念の報道もあり、子どもも大人も一気に行動が緩むことなく、慎重に対応してくれています。ワクチン接種も職員はほぼ全員が終了、中高校生は半分程が終了。未接種の子は、注射が嫌、副反応が怖いだけでなく、保護者の同意が取れずに、本人が希望しても接種ができない中学生もいます。施設で暮らす子どもの親権問題は、子どもにしないでよい行動制限や我慢を強いることもあり心が痛みます。厚生労働省では、毎年10月を「里親月間」と位置づけ、里親制度やファミリーホームを推進するため集中的に広報啓発を実施しています。メディアや街中で次のような言葉が並べられた里親制度のCMやポスターを見られた方もいるかと思います。「あたたかい家庭を必要としている子どもたちがいます。広げよう『里親』の輪」「それぞれの理由で親と離れて暮らす子ども達が、日本には約4万5千人います。そうした子どもを自分の家庭に迎え入れ、様々なサポートを受けながら養育するのが『里親制度』です」多くの方に、里親制度を知ってもらい希望者が増えるのは望まれますが、当の子ども達がこのCMやポスターに触れた時、どのような思いが去来するのか、少し想像力を膨らませながら、子ども達に問われた時に何を伝えるか、備えよ常です。
(至誠大空の家 施設長 国分美希)

保育事業本部

～10周年と10年目～

近年ではインターネット等の普及により、疑問の答えがすぐにわかる半面、答えの検証が必要です。

言葉も時代により印象や意味が変わるので確認が必要です。例えば「食べることができる」「食べられる」を、「食べれる」といったように、多くの方が“ら”抜き表現をされており、多数派なのだそうです。“ら”入れ表現も問題だそうですが、他にもファミレスで「こちらのほうで」と、案内されたら指先の方を見てしまいます。「レジのほうでお会計…」、もう見ませんよ。慣れ始めている自分にもモヤッとします。言葉は伝達の道具。使った(伝えた)もの勝ちなのですかね。

保育園も社会の中で、役目、役割が変わってきているように思います。必要なのか、開園している時間フルに使ったもの勝ちなのか、モヤッとする場面です。“モヤッと”も通じてますか？

話は変わりますが、おかげ様をもちまして至誠いしだ保育園は開園10年目を迎えました。2012年4月に開園しましたから来年は10周年。創設、設立、創立??今からノベルティーのデザインを用意しています。
(至誠いしだ保育園 園長 高橋 智宏)

高齢事業本部至誠ホーム

～フレイル予防の取り組み～

「フレイル予防」という言葉はコロナ禍でより多くきかれるようになりました。皆さんもご存じの言葉だと思えます。

フレイルとは、日本老年医学会が2014年に提唱した概念で「f reilty(虚弱)」の日本語訳。健康な状態と要介護状態の中間に位置し身体的機能や認知機能の低下がみられる状態のことを指し、適切な治療や予防を行うことで要介護状態にならずにすむ可能性があると言われていました。その予防としては「栄養」、「体力」、「社会とのつながり」が重要だとされています。言い換えれば、「バランスの良い食事」、「適度な運動」、「コミュニケーションを図る」ということでしょうか。

我がスオミケアハウスの居住者からも、いち早くフレイル予防をしよう!という動きがあり施設としても一緒に取り組んでいます。居住者自ら15項目からなる「フレイルのセルフチェック」を実施。其のうえで体力測定、食事内容チェックなどをして体操、栄養指導などを行っています。効果が期待されるところです。コロナ禍ですが居住者の皆さんの積極的な姿勢には見習うべきものがたくさんあります。

具体的な取り組み内容は3月に開催される「至誠実践報告会 - まことの心の取り組み」で発表の予定です。
(至誠ホームスオミ園長 井上 富士子)

(編集後記)ぐっと寒くなりました。コロナの感染数は不思議なくらい減っていますが誰もが油断は出来ないと思っ
ているのではないのでしょうか?油断大敵!(雲)